「茶旅」
"こぼればなし"

(28) モンゴル　遊牧民が飲む お茶が作られる場所は

コラムニスト　須賀　努

万里茶路については既に何度か触れているが、この道は中国の福建、湖南、湖北などの茶産地からモンゴル経由でロシアへ運ばれた茶葉の道である。その中継地であるモンゴルではどんなお茶が飲まれているのだろうか。

最近首都のウランバートルは急速に近代化し、おしゃれなカフェなども出来てきている。そこでお茶を頼むと、スリランカなどの紅茶のティバッグが出てくることが多い。昔から紅茶を飲んでいたのか、と聞くと、『1960年代ぐらいから紅茶を飲んでいたように思う』と知り合いのモンゴル人が回想する。

その紅茶はどこで作られたのかと聞くと『グルジア（現ジョージア）、あの紅茶は美味しかったよ』との答えが返ってきた。何故グルジアなのか、それは中国とソ連の蜜月から対立という歴史が関係していた。1960年頃には中ソ関係が悪化、それに合わせてソ連の衛生国だったモンゴルへの中国からの茶葉供給が途絶える。当時のソ連で唯一茶畑があった場所、それが現在のグルジアであり、はるか西方からモンゴルへ茶葉が運ばれてきた。これは壮大な茶葉の道の逆ルートだった。ソ連の崩壊以降、インドやスリランカの安価な紅茶が輸入されるのは最近のことらしい。

ただ遊牧民の生活習慣は都市とは違っていた。遊牧民には万里茶路で運ばれてきた、携帯に便利な、ブロック型の黒茶（磚茶）が既に普及しており、その茶葉を削って煮出し、牛や羊の乳とモンゴルの岩塩を混ぜて作るスーテーツァイが一般的に飲まれている。以前草原のゲルを訪ねた時、遊牧民がこのお茶を淹れて歓待してくれた記憶が蘇る。ただこの茶葉は一体どこから来たのだろうか、その時はあまり深く考えることもなかった。

実は2009年に初めてモンゴルに行った時は、地元スーパーで売られていた磚茶は、漢字の書かれたパッケージですぐに分かったのだが、2013年に再訪した際には、全てモンゴル語表記になっており、チベットのポタラ宮の写真が目立っていた。仕入れ先が変わったのだと思い込んでいたところ、モンゴル語の読める方から、『これは湖南省の磚茶ですね』と言われ、パッケージだけが変わったことを知った。

何故パッケージを変えたのか。それはモンゴルでの反中感情に配慮したと言われている。野菜など農産品は近年特に中国頼りとなっていたが、中国内で食品安全の問題がクローズアップされるようになり、加えてモンゴルでは歴史的に漢族に対する反感があるため、磚茶の売れ行きにも影響があったものと思われる。ただ問題はあっても磚茶は必需品のため、このような形で販売が続けられている。

モンゴルで売られる青磚茶

湖南省臨湘市と言えば、湖北省と隣接しており、黄鶴楼、滕王閣と共に江南の三大名楼の1つと謳われる洞庭湖の畔に立つ岳陽楼のある岳陽や屈原が身を投げたと言われる汨羅江にも近い場所である。先日偶然にも万里茶路の旅で聶市鎮という小さな街を訪れ、古くからある茶工場を見学する機会を得た。そこでは黒茶の1つである青磚茶が作られていたのだが、何とそのパッケージの1つがあのモンゴルで見たポタラ宮の絵だったのでビックリした。

この永巨茶業という茶工場は、ちょうど万里茶路で湖南・湖北が主要ルートになった1865年に創業されており、それから長い間青磚茶をモンゴル、ロシアに供給してきたが、戦時中日本軍の爆撃で破壊され、生産は停止されたという。1980年代に復活したとあり、中国の改革開放、ソ連の崩壊とともに、磚茶の輸出が再開されたとみられる。現在でも湖北省の趙李橋茶業と並ぶ、青磚茶製造業者であり、趙李橋が中国の内モンゴル自治区で有名であるのに対して、こちらはモンゴル国で特に名を馳せている。

茶工場は近代化されており、ブロックに固める工程も機械化され、ちょうど加工されていた。しかしその外では、固めた茶葉にマークを付ける刻印が、手作業で作られていた。この工場のすぐ近くには古い街並みが残っており、そこに流れる小さな川から茶葉が運び出され、やがて長江に着き、漢口を経て、北方へ向かった、と歴史にはある。

遊牧民にとって、ビタミンCの補給、羊肉などの消化促進などに効用があると言われ、日常生活上、なくてはならないこのお茶。モンゴルで売られている磚茶が、まさかこんな遠いところで作られているとは、当の遊牧民も知らないことかもしれない。ただその消費量は遊牧民が都市部に吸収されていくに従い、減少しているように見える。

（すが　つとむ）